

拙編白女の辻占などは、三年引すり、やう／＼に画出来候事も候へは、此度も、何そ板元よりきひしくさいそくいたし、氣に障り候哉と存候得とも、丁平旅行中にて様子わかりかね候。依之、四集つゝり立候もはり合無之故、金瓶梅三集、絵わり廿丁いたしかけ候へとも、先月は賤恙にて休筆、今以そのまゝに打捨置候。乍去、大暑にならざる内、金瓶梅・傾城水滸へ、廿丁つゝも稿し遣し度存候事に御坐候。

五月一六日付桂憲宛馬琴書簡（天理図書館蔵）

一、先月十日比より今以著述ハ休筆ニ御座候。なれとも無拋方よりたのまれ候画賛扇面等も多きたまり有之、右未進を果し、或ハ借用之書も見たく、抄録もいたし度候故、著述ハ休筆ニても半日も寸暇無之候。御遠察可被下候。先便申述候通り、俠客伝三集さし画、画工国貞二月中より今一枚も出来不参候。此画工甚流行故、勢ひ甚しく少しも氣に入らぬ事あれハ、一年も二年も引すりし、先年白女辻占の画杯も三年めニて、やう／＼出来候事有之、此度も板元きひしくさいそくてもせし故に、わざとかゝぬ事かと猜し候のミ、丁平旅行中故様子わかりかね候。依之、はり合無之候間、四集ハさし画の様子次第ニ可致、見合せ候事ニ御座候。金瓶梅画わりいたしかけ候得とも、先月不快已来これも打捨置候。何分氣かはなれ、筆すゝみ不申候故也。楽屋の事

二七 「天保五年」正月一二日

ケ様之仕合ニ候間、当年もかねて存候様ニは出来かね可申候。此段承知可被下候。何分画工ト結合候故、意も任せぬ事のミ也。嘆息之外無之候。御一笑／＼。

三 癸巳日記「五月一二日」

一、大坂河内や太介注文奇応丸小箱入宗伯捨之、夕七時過より瀬戸物「町」嶋屋佐右衛門方へ先払並便ニて出之。是迄二わり半引ニ致し遣し候得とも、菓種ことの外高料ニ付、二わり余引也。その代状中ニ申遣ス。尚又去ル六日、右河太状名前ちかへ、河内や茂兵衛より之注文と心得、その段六日ニ差出し候状中へ申遣し候間、右ハ間違之趣、茂兵衛方へ申遣へき為、十日限早便ヲ以、河茂へ書状遣ス。此状ちんハ此方払也。今日嶋やねハ正月十七日松坂行紙包脚ちんも済よし申ニ付、右に請取印形（虫損） 処々有之、現金払ニて相済候処、いかゝの義ニ候哉と宗伯甲ニ付、全く心得違のよし、嶋屋帳場重手代罷出、わび候よし宗伯先之、夕七半時過宗伯帰宅。

二七 「天保五年」正月二日（別翰）

一 甲午日記「正月一二日」

一、予大坂河内や茂兵衛へ遣し候年始状并ニ別翰一封、京角

一七七

鹿清蔵へ遣し候年始状、いせ松坂殿村佐六に遣し候書状、昨日認候と共に三通、昼時封し早。

一、昼後しまを以、瀬戸物町嶋や佐右衛門方へ、京・大坂・いせ松坂へ遣し候状三封、飛脚ちん差添遣之、新かよひ帳ニ去ル六日出、いせ松坂小津氏に之紙包請取をも写させ、今日之分同断請取写させ、夕七時比帰宅。

## 二 癸巳日記〔一〇月二十九日〕

一、夕八時前丁子や平兵衛来ル。予対面、俠客伝四集年内彫刻皆出来かね候ニ付、明々年末正月うり出しニいたし度よし申之、右潤筆残り金七両持參請取早、并ニ当正月中請取候美少年録四輯潤筆内金十兩ハ、八大伝八輯の潤筆ニまハしくれ候様被申ニ付、其意ニ任せ早。猶又八大伝八輯追内金三兩被渡之。都合拾三兩の内金ニ成ル。俠客伝四集うり出しの事ニ付、申談し度義も有之候へ共、丁子や多用のよしニ付不及其義、明日手紙にて申遣し、且大坂河内や茂兵衛へも書状遣し、己来俠客伝五集の著編ハ断ニ及候内心之旨、今夕宗伯申聞おく。

## 同〔十一月一日〕

一、引つゝきて丁子や平兵衛より小ものを以、俠客伝三集一より三迄三冊ほり立、初校すり本被差越之、但一二兩冊繪つき二丁つゝ不足也。……依之、右使またせおき、大坂河

内や茂兵衛へ遣し候書状一通認之、右ハ俠客伝四集明々年未正月うり出しニ致し度よしニ付、さやうニ延引ニ及ひ候て、□年のこれら大部もの満尾ニ数年かかり無覚束存候間、四集切ニてあとハやめ可申存趣之断状也。別紙丁子やにも其段申遣ス。……

## 三 同〔十一月一日〕

一、丁子やより小ものを以、大坂河内屋茂兵衛状届来ル。使差置帰去。十一月廿二日出之状、朔日ニ此方より差出用書の返翰也。

## 同〔十二月五日〕

一、昼後丁子や平兵衛為寒中見舞来ル。肴代并たは粉一袋被贈之。予対面、俠客伝三集うす墨つや墨入分色さし見せらる。此内、惣もくろくわくたゝの半丁へのミ薄墨入有之、其段不<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>申示処、不及其義追て可<sub>レ</sub>申遣也。且大坂河内や茂兵衛、俠客伝四集うり出し延引之義ニ付、河茂より<sub>〔虫損〕</sub>被<sub>レ</sub>頼<sub>〔虫損〕</sub>参<sub>レ</sub>り候よしにて、段々わひらる。依之、聞濟候趣及返答趣談し早。右要談等早て帰去、雪中也。

## 〔参考〕 殿村篠齋宛馬琴書簡（天保四年十一月六日）

一、俠客伝三集のさし画、やうく九月十八日に出来揃ひ、夫より彫刻差急き、此節追々ほり出来、いまた揃ひ不申候得

とも、十一月一日より校合にとりかゝり罷在候。十二月中旬・下旬迄には、せひ／＼出版可致候。うり出し早々、二部、大伝馬町御店迄差出し可申候。

一、同書四集は、八月中旬より稿本に取かゝり、これも引つゝき来正月中旬迄に、せひ／＼うり出し度よし、丁子や平兵衛達て願ひ候間、任其意秋中より昼夜出精いたし、十月廿九日に四集五冊不殘稿本出来いたし、筆工は兩人にて半冊つゝ引わけ書せ候故、書面板下と稿本と半冊ちかひにて同時に出来、手廻し尤神速に候処、大坂板元河茂より急状到来、十二月中うり出しに不成候て、正月うりに成候ては、捌あしく御坐候間、大延しにいたし、四集は明々年末正月二日うりに致し度よし申来候。是にて秋中よりの出精画餅に成候故、五集の作は断候て、已来かゝぬつもりに書状大坂へ出し候。これらの意味、桂窓子への状中へくはしく注し申候。彼仁より御聞可被下候。同文言、御両方へは書候いとま無之候故、御一方は略し申候也。

(小林花子「曲亭馬琴書簡特集」II「上野図書館紀要」第四冊一二所収)

〔参考〕 小津桂窓宛馬琴書簡（天保四年十一月六日付）

一、右「俠客伝」三集前書之通り画工にてま／＼つかへ候間、秋迄ハとても年内出版心もとなく存候ニ付、四集を引つゝき綴り候勢ひなく、遂ニ長休ミにいたし罷在候処、八月上旬江戸板元丁子や平兵衛参り、俠客伝四集之事、画ハいか

二七 「天保五年」正月一二日

やうニもいたし間ニ合せ候間、何とそ四集を引つゝき出版にいたし度候。依之願ひ出候。何分早々御とりかゝり可被下候様ニと申候間、答ニ潤筆も夏中過半請取置候上は、いなむにあらす候得とも、しはらく打捨置候故、急ニも筆もとりかたく、いつれ八月中旬比よりならてハ取かゝりかた

く候。左候へハ年内彫刻出来かね可申哉之旨ヲ以推し候処、板木師の義ハ一冊つゝ引わけ、速ニはらせ候つもり手当いたし候間、せひ／＼間ニ合せ可申候トかたく申候間、八月十五日より筆とりはしめ候処、丁平ひたいそきに急き候間、一回半冊つゝ稿し候へハ、直ニ筆工へわたし申候。尤筆工兩人ニかゝせ候間、よほど精出し不申候てハ、筆工に追れ候まゝ、昼夜これのミにて日をくらし候。八九月中迄は悴もとかく同様にて、よほどの大病ニ候へ共、見上るいとまもなく精出し候。画ハ柳川重信増、重政二代め重信と改名いたし候へとも、画ハ未熟也。なれともはやく出来候上、丁平懇意にて大ニひいきに候間、是ニ画せ候。既にして十月廿九日迄ニ五冊不殘稿し早り、板下書画共四冊め迄出来、五冊めの第三十九回半冊筆工最中ニ書畫候よしの節、右廿九日夕方丁子屋拙宅に罷越候て申スやう、扨彫刻之義ハ年内ほり上り候ても、江戸大坂ハ第二集のことく、来正月下旬うり出しニ成り可申候。然処大坂にてハ、十二月下旬ニうり出し不申候てハ、捌甚不<sup>サレ</sup>宜候ニ付、第四集ハ明々年末正月二日うり出しニ可致旨、申来候。尤三集も画

一七九

工にておそなはり、年内うり出しの間ニ合かね候ハ、是亦明午ノ十二月うり出しニ可致候間、板ヲ船ツミニいたし、来夏迄ニ登せくれ候様申越し候。私事<sup>あひ持</sup>の義ニは候へとも、実の板元ならず候間、自由いたしかたく候。依之四集ハ、明々年末ノ正月二日うり出しニ致し度旨申候。是にてビツクリいたし、且呆れ候得とも、商ひ向の不都合と申ニハ手もつけられず候故、その意ニ任せ、ともかくもと挨拶はいたし候へ共、中一ヶ年置候而うり出し候事、あまりに長くしく、ばかしく、八月中より大病人の中にて、昼夜出精いたし候骨折、画餅ニ成り候故、もはや五集ヲ書キ候氣もなくなり候ニ付、則大坂河茂に急ニ書状差出し、四集江戸の宅配り少しも無如在候処、十二月製本不出来候てハ、捌ケ方不立候ニ付、明々年正月二日うり出しニ被成度よし、承知ハいたし候へ共、拙者事追々老年ニ及ひ候処、左様ニ中一ヶ年ツも間を置たくうり出しニ成候てハ、大部之もの中ノ生涯満尾心もとなく候。依之、俠客伝ハ四集迄にて已来五集ハつゝり不申候間、かねて承知いたし候様、きひしく申遣候。全体四集ハ五集の縮染にて、作者の専文ハ五集に有之、いろく<sup>シタツメ</sup>腹稿いたし候を捨て仕舞候仕合、御賢察可被成候。大坂板元ハ河太、巡島記にてこり候間、俠客伝も二の足を踏候処、丁平達て願ひ候て、一式引請万事江戸板元の通りニいたし候よし申ニ付、つゝり立遣し申候処、果して如此変卦出来遺憾不少候。俠客伝四集うり出し大長

のひニ成候故、美少年録四集も来年ハ延引、明々年より又はしめ可申哉、いまたしれかね候。その内ニハ拙齡七旬ニ及ひ候故、氣力追々おとろへ可申候。何事も勢ひニ従ひ候ものニ候処、只今の利のミ考、はやく全力満尾させて株板ニせんと思ふ了簡なきハ、賈豎の猿智恵にて是非もなき事と、歎息の外無之候。右之仕合ニ付、四集も此節板下ともし不残出来候へとも、うり出しハ明々年末ノ正月ニ成り可申候。御一笑と奉存候。

(天理図書館蔵「馬琴等書翰集」九〇)

四 丁子屋平兵衛の大坂行については、二四 天保四年四月九日二五 同五月六日書簡参照。

二八 (天保五年) 二月一八日

一 甲午日記(二月二日)

一、夕七時前、いせ松坂殿村佐六状大封一ツ、大伝馬横丁殿村店より届来ル。正月廿日の状也。右状中俠客伝三代金式分在中、外ニ江戸名所図会代金為替手形入にて状三通。一通ハ年始祝義状、壱通ハ旧冬<sup>1</sup>の返輸長文也、一通ハ旧冬申遣し候異聞<sup>2</sup>の返輸也。正月七日此方より差出し候俠客伝三集、小津新蔵方へハ正月十六日ニ着いたし候よし、佐六分